

# 個人の家

## —Thoreau と Sarton をめぐって—

安井信子

### The Individual House —Thoreau and Sarton—

Nobuko YASUI

キーワード：家，個人，一人暮らし，野性

#### 概 要

ソローもサートンも、人生のある時期、自然の中に家を見て、一人暮らしをした。家の周りの野性的な自然は、人生の余分なものを捨てて本質のみを生きることを読んだ。二人は因習に捕われることなく、本来の自分を知り、天職を遂行するための場所を我が家とした。それを個人の家と呼ぶならば、家族や共同体や社会の中でいかに個人の家を作っていくかが、これからの私たちの課題であろう。

#### はじめに

メイ・サートンの『夢見つつ深く植えよ (Plant Dreaming Deep)』<sup>1)</sup>や『独り居の日記 (Journal of a Solitude)』<sup>2)</sup>を読むと、時々ふとソローの『ウォルデン (Walden)』<sup>3)</sup>を思い出すことがある。二人の共通点は確かに多い。彼らは生涯シングルを通し、独り住まいの家を建て、一人在ることを選択した。二人ともニューイングランドの自然をこよなく愛し、自然と親しく交わり、詩作、著述を主な仕事とした。どちらも既成の思想、宗教に捕われず、型破りな生き方をし、高度に宗教的な資質をもっていた。実際、ジョージ・ベイリンもサートンを「現代のソロー」と呼んでいる。彼らの作品を読んでいると、ネルソンにあるサートンの家と、ウォルデンの森に建てたソローの家がおのずと心に浮かんでくる。両者の違いと共通点は何か。なぜ今彼らの家が現代人を引き付けるのか。彼らの家から私たちは何を学ぶことができるのだろうか。

#### 1. 簡素な家

H. D. ソロー (1817～1862) は1845年、二十七歳の

(平成12年9月7日受理)

川崎医療短期大学 一般教養

Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

とき、ニューイングランドの村コンコードからウォルデンの森に行き、独力で小さな家を見て、二年二ヶ月を一人で暮らし、その経験をもとに『ウォルデン』を書いた。ソローによれば、人々は家屋、農地、家畜の奴隷となり、労役に忙殺され、本当に十全な生き方と無縁な生活をしているが、そうした余分と邪魔を手放し、生活に真にならぬものを、人間生存の本質的法則を見出すために、一つの実験として森に行ったという。

僕が森へ行ったのは、慎重に生きてきたからだ。生活の本質的な事実だけに向き合って、生活が教えてくれる事を学びとれないかどうかを突きとめたからだ。……僕は生活でないものは生きて欲しかった。生きたとはそれほどに貴いことだ。僕は深々と生きて生活の精髓をしゃぶり尽くし……生活でないものはすべて追い散らし……生活を片隅に追い込んで、ぎりぎりの条件にまで切り詰め……簡素、簡素、簡素だ。(90—91)

彼が建てたのは簡素そのものといえる家だった。間口10フィート、奥行き15フィートのワンルーム、家具はベット、テーブル、机、三脚の椅子のみ。「家具付きの家を持つくらいなら野外に座っているほうがいい」(36)、「荷物が多ければ多いほど貧しい」(66)という主義で

あったので、家は必要最小限をそのまま家屋化したものとなった。

何しろ、鉄道線路工事の道具をしまう大きな箱を見かけて、「こういう箱を家として各人がもてば、無駄に時間を取られず誰しも自由な人生を送れるのではないか」と思ったソローだから、家も箱的発想であり、余分のものがないことを理想とした。家具のみならず、カーテンや玄関マットまで、戸外との境界となるものをできるだけ追放した彼にとって、世界と自分の間にバリアがなければいけないほど、広い野外に晒されていればいるほど好ましい。人の家は亀の甲羅、貝の殻、鳥の巣のように、内部が必然性をもって外側へと現れた形であるべきだと主張する。ソローの家はいわば彼個人の生物的殻であり、彼はそれを自分一人で作る技術と体力をもっていった。

一方メイ・サートン(1912~1995)は、四歳のとき両親とベルギーからアメリカに移住し、十七歳で親元を離れて生活を始めた。著作、詩の朗読、講演をしながら欧米を移動、やがて母に死なれ、ついで四十六歳のとき父が急死して、一人っ子だった彼女は天涯孤独の境遇となった。母がプロとして製作した美しい家具を手放すにしのびず、その置き場所を求めて家を探し、両親の家を売ってニューハンプシャー州の僻地ネルソンに古い家を購入、改築して住まうことになる。身よりのない中年シングルの彼女は、「四十代の女性には間違った人や間違った家と結婚するゆとりなどない」(24)と自覚し、不安におののきつつも、十八世紀に建てられたその家の静かで優雅な佇まいに惹きつけられて決意したのだ。

改築に当たり、彼女は壁を白に、床をマスタードイエローに、キャビネットをブルーにし、ニューメキシコのサンタフェで経験した広大な「空気、光、空間」の雰囲気、家に取り入れようとした。家や建築のことに全く無知であったにもかかわらず、様々な人の好意と幸運に恵まれて、それは簡素で美しい家となった。「寂しくないかって? とんでもない。家が一緒だから」(59)と書いているとおり、家は彼女にとって共に暮らすことを選んだ「結婚相手」である。両親の家具を置き、思い出の品々と花を飾った人生で初めての「我が家」は、独居を貫く彼女個人の場所であるとともに、人々の愛情や過去と未来の交差点、すなわち他者と親交を結ぶ場の要素ももっていた。このように、世の喧騒から遮断され、自然の中に建てられた一人住まいの小さな家というイメージは似ているが、家を身にまと

う二人のやり方には少し違いがあった。

## 2. 自然

家の周囲を見てみよう。二人とも「この家のいいところは人里離れたところだ」と言っているように、彼らの家は野性的な自然の中にある。ソローの家はウォルデンの森の中にあつて、「いかなる隣人からも一マイル離れて」おり、人工の物は何一つ見えない。森には様々な野生動物が棲み、また透明に澄み切ったウォルデン湖がすぐ近くにあつた。サートンの家は36エーカー(四万坪余り)の土地付きだったので、彼女は誰に邪魔されることもなく私有の自然を楽しむことができた。それにネルソンは教会と廃校と一握りの家があるだけの辺鄙な村である。彼女はその土地を「地の果て」と呼び、厳しい気候にたじろぎつつもその静けさと広さを嘆賞した。但し、二人の周囲の自然は本格的な荒野(wilderness)ではない。ソローの家はコンコードの村からほんの1マイル半、ふらりと歩いて村に行ける所で、当時珍しかった鉄道さえ近くを通っていた。またネルソンも僻地とはいえボストンから車で二時間の距離だという。二人が親しんだ近隣の自然は、野性味が残っているとはいえ、人と自然が共存しうるニューイングランド的自然であつた。

ソローはもともと自然に親しむ傾向が強く、自然の方でも彼に親しんだようだ。野生の小鳥が彼の肩にふと止まって行ったとか、リスが彼の靴を踏んづけて通ったなどというエピソードもある。エコロジーの祖ともいべき彼は、自然の声に耳を澄まし、生きる根本法則をそこから学び同胞に伝えるという姿勢があつた。「僕ら自身が『自然』同様単純で健やかになろう」(78)と書いているし、『ウォルデン』の大きな魅力の一つは何と言っても、繊細かつ雄大にして迫力溢れる自然描写にある。

滴り落ちる雨だれの音や、家の周りのあらゆる音や光景など「自然」がこれほどやさしくありがたい仲間であり、僕のいのちを支える大気のように、言葉に尽くせない限りない友情を与えてくれることを突然感じ取った。小さな松の針葉が一本残らず共感して脹らみ、僕の友達になってくれた。僕らが野蛮な荒地と呼んでいる風景にも、僕と血の繋がりのあるものが宿っている……僕に馴染めない場所はないと僕は思った。(132)

こういう文章を読むと、実際ソローの家は自然界そのものではなかったかと思えてくる。「庭などないのだ。囲いのない『自然』がこちらの敷居まで続いている。窓のすぐそばで若い木々が成長する」(128)という文は、彼があるがままの自然を棲家としていたことをほのめかす。それとともに彼は自然の測りがたさと野性を賞賛した。

サートンもまた自然を非常に愛する人であった。父は歴史学者、母は絵や家具をデザインする芸術家で、きわめて学術的な家庭に育ったわけだが、サートンは講演してアメリカを回るうちに、様々の土地の広大な自然に魅了された。ネルソンに棲みつくと、母譲りの情熱で庭の花造りに熱中し、小鳥の餌場に餌を絶やさず、訪れる鳥達を楽しみとし、「青と金色に輝く世界」(53)の樹木、牧場、空に見とれた。ヨーロッパの馴化された自然とは一味違う、アメリカの土地に特有の野性味に彼女は敏感に反応する。庭を造るときも、「ニューハンプシャー州全体を巨大な日本の石庭として、野性味とさりげなさを保存しよう」(121)とし、「この庭の最も喜ばしい所は周りが荒野だということ。広大な自然の中に秩序ある小世界があるということ」(123)と述べている。ソローもサートンも身近な友として自然に馴染んだが、同時にその自然の広大さに——手なずけられない、野性的な要素に深く惹きつけられていたのである。

### 3. 一人暮らし

このように自然に囲まれて一人で暮らす彼らは、孤独ではなかったのだろうか。「僕は一人が好きだ。太陽も一人、神も一人……ウォルデン湖、タンポポ、蜂、星、風が寂しくないのと同じように僕は寂しくない。」(135-6)と高らかにソローは言った。といっても彼は世捨て人とか隠遁者だったわけではない。兄が若くして破傷風で亡くなったときは悲嘆の余り自分も衰弱するほどに、家族に対する彼の愛情は濃やかだった。父親の鉛筆製造業を目覚しい技術改良で助け、父亡き後は仕事を引き継いで家族メンバーとして立派に役を果たしている。また社会に大きな関心を懐いていたことは、奴隷制度を擁する政府に税金を払うのを拒み、進んで牢獄に入った経験から生まれた『市民としての反抗』に明白である。彼は一つの職業に縛られないという意味で些か周延的ではあるが、教師、雑誌編集者、講演者、作家、鉛筆製造業者、測量技師として、コンコードの村という共同体の中に自分の場所をもってい

た。

ソローがコンコードに愛着していたことはよく知られている。他所に行っても馴染めず、結局故郷の村に戻るのが常だった。自然を愛し、西へ向かう「散歩」と旅を語り、人生の無数の軌道と無限の可能性を歌ったソローの人生は、しっかりとコンコードに根付いていたのだ。だからこそ、過激なまでにきっぱりと身一つで森に出向き、一人で暮らす必要があったのだ。

僕らは日常のごくさりげない散歩のときにも、無意識にはあるが……周知の灯台や岬をたよりに舵を取る……。完全に迷子になってようやく「自然」の広大さと不思議さがつくづくわかるようになる。僕らは迷ってからでないと、つまり世界を失ってからでないと、自分自身が見えてこないし、自分の居場所も、自分と係わる世界の無限の広がりも皆目わからないのだ。(171)

本来の自分自身と、本来の自分の居場所を知るために、彼は人の居ない森に行き行って実験をした。共同体の画一的な価値観に侵犯されないさら地に身を置き、可能な限り自己と自然のみから家を作った。そこで執筆を続け、畑で豆を育て、一年に六週間働けば食べていけることを実証した。こうして過去の伝統や共同体の固定観念を超えた自己の拠点を探求し、その本質を貫くことができることを確信して村に帰ったのである。

ソローと異なり、ベルギーで生まれアメリカに亡命したサートンは、故郷も家族も家ももたなかった。文化的心理的に祖国をもたず、一つの地域に住みつかず、女性であることが真の芸術家になる妨げとなった時代に女性であり、しかも独身というマイノリティ、身寄りのない境涯、その上同性愛的傾向があり、あらゆる意味でアウトサイダー、外れ者である。だから家をもつこと、定住すること、根付くこと自体、全く初めての経験であり、年齢を思えば「途方もない考え」だったが、彼女は敢然と「結婚にも比べられる根源的な変化」(24)に、「冒険」に乗り出した。家はかくまってくれる「隠れ家」ではなく、「厳しい要請」(93)だった。だから彼女は家を船と感じ、一所に根を下ろす生活に行く先のわからぬ航海に喩えた。

彼女が一人暮らしを選んだのは、孤独が「我が領土」(54)であり「私の仕事」(56)だからである。孤独は平穏気楽な生活とは程遠い。「強烈な沈黙がわずかの軋みや囁きを拡大する」(60)ように、孤独は「人を動物

のように鋭敏にし、極度に醒めた、自己を開放した状態にする。それは詩人に不可欠の、詩が湧き出してくる意識状態であるが、同時に不安と動揺の風土でもある。この危うい状態を支えるフレームとして彼女の家はあった。日課と義務が自由を自由たらしめるように、家の「明晰さと構造」や「秩序と美」が創造性を持続させるのだ。しかし一人といっても、彼女の友人知己は欧米に散在していた。子供時代に世話になったヨーロッパの人々や、母を看取ってくれたジュディなどは、殆ど家族のように交流を続けていたし、読者からの手紙も訪問者も多かった。ソローよりほぼ百年後に生まれたサートンは、ネルソンに根付きながらもそのネットワークはコンコードのように村落共同体の生活圏ではなく、世界に広がっていたのである。

#### 4. 野性と個人

『ウォルデン』はなぜ読む人を突き動かす力があるのか。『夢見つつ深く植えよ』はなぜ読者の心を引き付けるのか。二人の家がそれに答えてくれる。彼らの家はソローの言葉を借りると「実験、冒険、危機、発見」、サートンによれば「内面に向かう人生冒険、成長、変化、挑戦」の場だった。まさしく生きるとは内面的冒険であり、絶えざる成長ではあるまいか。型にはめられた人生、固定化し停滞した生活を誰が望もう。それなのに多くの人々は生活するうちに型にはまる、旅立つ気力を失う。それは自分のいのちの本質、本来の自己の場所としての「家」がないからだ。地位、名声、金銭、家族の理想像等、偽りの家を維持するに汲々としてエネルギーを使い果たしてしまうからだ。冒険の人生を送るためには安全確実な場所が要る。変化の只中に存在するためには不変の一点が要る。逆説的に聞こえるが、冒険、航海、成長のためには自分の「家」が、本質的に一定した、確固たる自分の時空間軸が必要なのだ。

ソローもサートンも、きわめて明確にそれを作り上げた。その家は、彼らが本当にやりたいことをし、天職を追求して生きる場所であった。そのような家を「個人」の家と呼ぶことができよう。アリエスは『〈子供〉の誕生』<sup>4)</sup>の中で、中世の共同体では個人の生活が仕事で占められ、家族は重視されないが、十六世紀頃から子供の登場とともに家族意識が発生したと述べている。家族内の情愛が理想化されるにつれ、家族は次第に社会に対して閉鎖的になり、結局「近代に勝利を収めたのは個人主義ではなく家族主義」だという。しかし二

十世紀も末になるとこの家族偏重主義の破綻は明白になってきた。テレビも電話も一家に一台ではなく一人一人がもつようになった時代は、インターネット等で個人が世界の情報網に直にアクセスできる時代である。情報伝達技術の革新は「家」を開き無防備な裸にし、個人を世界に直結させた。様々の問題を起こしつつ近代家族が変容し、新しい個人の「家」が求められるようになったとき、ソローとサートンは参照点を提供したのだ。

彼らが野性味のある自然と常に身近に接していたことは、それと大きな関係がある。例えばソローがすべての余計なものを捨て、「壁を剥き出しに、生活を赤裸々に」しようとしたのは、自然に晒され自分の「人生の本質」「生活の髓」のみを生きるためだ。サートンもまた「生活をその髓まで故意に削ぎ落とそうと」(87)した。彼女が部屋に飾っていた、海と漁夫を描く北斎の浮世絵には、「彼(漁夫)の周囲のあの空のなんとこの壮大さ、かくも空にしていのに満ち(what grandeur in that emptiness around him, so empty, so alive)」(46)と書きこみがしてあった。「空」とは、広大な自然であり、同時に個人に限りない成長を可能にする無限の背景だ。彼らにとって野性的な自然は、人が家族や共同体や制度に囲い込まれてしまわない「個人」であるための、バックグラウンドを意味していた。

野性の自然を、ソローは人間に管理されない「広い余白」、サートンは「世界の果て」と呼び、彼らはそこに我が家を——「個人」の家を作った。「だから私がここで働いているときに起こることは、私と神の間に起こる」(91)とサートンは書く。神の前に「私」が裸で晒される——自分が神の恩寵を表現すること、本当になすべきことは誰にも頼れず何のせいにもできない、どこまでもすべて自己の責任だということ、それは生易しいことではないが、それがあくまで「個人」であり彼ら自身であるという自由の意味だ。勿論人は単独では生きられない。互いに助け合い、依存しあう関係にある。しかしそれでいてなお一人一人が個人としての生を貫徹できることを、ソローとサートンは実証した。ソローの最期は嬉々として安らかであり、また一滴残らず人生を燃焼し尽くしたいと切望したサートンも、希望どおり最後まで意識明晰、穏やかな死だったという。個人として喜びも苦しみも強烈に味わい、感謝に満ちて「野性」に生きた二人だった。

### おわりに

西洋の教育思想が日本に導入され、村共同体の伝統に理念が取って代わり、次第に母親が子育ての責任者とされたとき、親は子供が悪しき秘密を持たない「透明な家庭」を理想とした。やがて父親は企業に、母親は家庭に囲われ、子供は母親と学校に囲われ、息もつけない子供は「透明なボク」と言い、「私の居場所はどこにあるの」と呟く。どの家族メンバーも何かに囲われ、自分の本当の居場所がない。つまり個人として生きていない。

家族という観念が枠となって個人を圧死させない家、家族を形成しても個人でいられる家は可能か。それはどんな家族関係か、そんな家が可能な社会システムは何か。そういう問題が模索される今、ソローとサートンの家が一つの参考になる。文字どおりの荒野でなくてよい、何らかの形の野性に触れよ、とその家は囁く。

野性とは挑戦する自由の謂いであると、それとともに共同体に根付き、広いネットワークを持ち、かつ十分な個人であるような在り方が、今後試行錯誤を経て見出されるにちがいない。

(注) ( ) 内の数字は各著書の引用の頁を示す。

### 文 献

- 1) Sarton M: *Plant Dreaming Deep*, New York: W. W. Norton & Company, 1996.
- 2) Sarton M: *Journal of a Solitude*, New York: W. W. Norton & Company, 1992.
- 3) Thoreau H D: *Walden*, Princeton: Princeton Univ. Press, 1973.
- 4) アリエス P: 〈子供〉の誕生, 杉山光信・恵美子訳, 東京: みすず書房, 1984.

なお、文献3)の訳文については酒本雅之氏の訳を参考にさせていただいた。

